

今日のダニエル書 7 章は、4 つの幻で出来上がっています。
おそらくダニエルは、一晩のうちに 4 つの幻を見るんですね。

- 1 番目の幻 ▶ 4 つの世界帝国の 1 から 3 番目の国の説明
- 2 番目の幻 ▶ 4 つの世界帝国の 4 番目の国についての解説
- 3 番目の幻 ▶ 4 番目の国を終わらせる裁きについての預言
- 4 番目の幻 ▶ キリストの地上再臨とメシア的王国 / 千年王国について

今日はこの順番に沿って話したいと思いますが、そろそろ声の限界が来まして。
ここで帰るわけにはいかないので、いつもより短めでお話したいと思います。

ダニエル書 7 章

1 バビロンの王ベルシャツアルの元年に、ダニエルは寝床で、ある夢と、頭に浮かぶ幻を見た。それからその夢を書き記し、事の次第を述べた。

ベルシャツアルの元年は BC553 年。バビロンが崩壊する 14 年前のことです。
ベルシャツアル王については前回見ましたね。
実は今日は 7 章ですが、時系列では 4 章と 5 章の間なんです。4 章・7 章・5 章。

2 ダニエルは言った。「私が夜、幻を見ていると、なんと、天の四方の風が大海をかき立てていた。

私が夜、幻を見ていると。これが 4 回出て来ますが、ここが 1 回目です。
イスラエルで海という時は 4 つあります。塩の海は死海。葦の海は紅海。
キネレテ湖はガリラヤ湖。大海 / 大きな海は例外なしに地中海。

3 すると、四頭の大きな獣が海から上がって来た。その四頭はそれぞれ異なっていた。

地中海から四頭の獣が出て来ます。獣に例えられている 4 つの帝国は 4 つとも、地中海の制海権を持っています。四頭の大きな獣は、国家やその国を代表する王のことです。

17 これら四頭の大きな獣は、地から起こる四人の王である。

なので、単に動物のことを言っているのではなく、動物に例えらえた獰猛な帝国と、その帝国を代表する人物のことを語っているんですね。

1 番目の幻 ▶ 4 つの世界帝国の 1 から 3 番目の国の説明

1 番目の帝国 : バビロン

4 第一のものは獅子のようで、鷲の翼をつけていた。見ていると、その翼は抜き取られ、地から身を起こされて人間のように二本の足で立ち、人間の心が与えられた。

獅子のよう。獅子だとは書いてないので、たとえだと解釈しなければなりません。
1 番目はバビロンです。バビロンのシンボルは獅子だからです。

昔のバビロンにはイシュタール門があり、ブルーレンガにライオンが浮き彫りになっていました。

2003年第一次イラク戦争の時、米軍とポーランド軍がバビロンに陣を敷きました。聖書の観点で見ると、バビロンは悪の文明国家ですよ。だけど、イラクの独裁者サダム・フセインにとっては、模範とする国家なんです。バビロンはエルサレム神殿を炎上させ、ユダヤ人国家を粉砕したから。アラブの国が東になっても勝てなかったイスラエルを粉砕した。このことを非常な英雄行為と考えていました。なので、ここに宮殿を建てたんです。バビロンの復興にお金をかけてたんですね。

それをメチャクチャにしたのが米軍です。米軍はここに2000人級のプレハブの兵舎を建てました。それで、遺跡物をメチャクチャにしたんですね。その中から大きな石で出来たライオンの像が出てきました。顔は無いんですけど。その発掘からも分かるように、バビロンのシンボルはライオンなんです。

バビロンを帝国として皆が認めるようになった理由があります。バビロンがオリエント世界を治める前は、アッシリアが治めていました。アッシリアを倒したのがバビロンです。倒された後のアッシリアは4つの国に分かれました。①バビロン ②メディア ③リディア ④エジプト。バビロンがメディアと一緒にあって、アッシリアを崩壊させた。それまでは、だれもアッシリアに盾突くことはできなかった。そのアッシリアを倒すのに主導権を取ったバビロン、その王ネブカドネツアルは素晴らしいということなんですね。

ネブカドネザルは獅子の王でしたが、傲慢になったので、鬱のようなメンタルに、発狂したように変わってしまいます。だけど、悔い改めた後に正気に戻ったということを、既にダニエル書で説明しました。それが、その翼は抜き取られ、地から身を起こされて人間のように二本の足で立ち、人間の心が与えられた。バビロンが終わりました。

2番目の帝国：メド・ペルシア

5すると見よ、熊に似た別の第二の獣が現れた。その獣は横向きに寝ていて、その口の牙の間には三本の肋骨があった。すると、それに『起き上がって、多くの肉を食らえ』との声がかかった。

バビロンの次に世界帝国になったのは、バビロンを倒した**メド・ペルシア**で、メディアとペルシアの連合国家です。

ところで新改訳聖書では、その獣は横向きに寝ていてと書いてますが、聖書の原文にはそんなことば書いてません。横向きに寝ていては意識なんです。口語訳聖書が直訳していました。**これはそのからだの一方をあげ、**

右半身と左半身、横向きに寝たら一方が上がりますよね。
左半身を下にして横向きに寝ると右半身は上がる。なので横向きと言ってるんです。

すなわち、メド・ペルシアは連合国ですが、対等な力関係で移り変わるのではなく、後から来たペルシアがメディアを呑み込んで、一方的に1つの国になるということを示唆している。それが起こる14年前に預言してるんですね。

その口の牙の間には三本の肋骨があった。
3種類の獣を食べた。そして、骨をしゃぶったということです。
メド・ペルシアが食べた3つの国は、アッシリアから分かれたバビロン・リディア・エジプト。つまり、旧アッシリアは丸ごとペルシアになったんです。
アッシリアもかなわないほど大きな国になりました。
ライオンと熊、サイズのにはどちらが大きいですか。熊ですよ。
ペルシアはバビロンの16倍あるんです。ギリシアよりも大きい。

ペルシアは3つの国を食べた後、横向きに寝ていた状態から起き上がって。
3つでは我慢できなかったんです。3つの国を制覇した後、それを主力にして、東はインドまで、西はギリシアまで攻めて行きました。
ものすごく大きな帝国になるんですね。

ところで、人類史上最大の帝国はどこだと思いますか。大英帝国です。
18世紀・19世紀のイギリスは、ここに出て来る4つの国と比べ物にならないくらいでかい。海軍力があったからね。それを上回るのが4番目の国です。

メド・ペルシアは起き上がって、多くの肉を食らうんですが、やり過ぎました。
反撃を受け始めるんです。それを見事に成功させたのが3番目の国。

3番目の帝国：ギリシア

6その後、見ていると、なんと、豹のような別の獣が現れた。その背には四つの鳥の翼があり、その獣には四つの頭があった。そしてそれに主権が与えられた。

メド・ペルシアの後には、**アレキサンドロス大王のマケドニア帝国**です。
よく**ギリシア**と言われます。そう言ってもいいんですが、現代世界史の表現では、マケドニア帝国の方が正確だと思います。でも、ギリシアにしときましようか。
その方が耳に慣れてるでしょ。

アレクサンドロス大王のお父さんはフィリッポス王です。
新約聖書の**ピリピ人への手紙**、ピリピはフィリッポスから来てるんですが、元はフィリッポ。ピリピて…。そんなんがようあるんですよ。
表記は原文に近い方がほんまはいいと思います。

フィリッポス王は結婚式の最中に暗殺されました。奥さんは何人もいるんですが、殺された時息子がいて、アレクサンドロスのお兄さんですが、知的障害者なんです。

なので跡継ぎになれない。アレクサンドロスは父親が殺された時 20 歳でした。プライドが高いギリシア人たちは、こんな 20 歳の若造がまとめられるはずがないと思ったんです。が、まとめたんですね。見事に。なぜそんなことができたのか。

アレクサンドロスが 13 歳の時、フィリッポスは帝王学を学ばせるために、家庭教師を雇いました。アリストテレスですよ。アリストテレスの師匠はプラトン。プラトンの師匠はソクラテス。ソクラテス・プラトン・アリストテレス。あのアリストテレスから直々に帝王学を学んだのがアレクサンドロスです。

家庭教師、詳しく言うと、詳しく言いたくないんですけど、のど痛いから。これマンツーマンじゃないんです。たしかミモザという学園を造ったんです。松下村塾（しょうかそんじゅく）のマケドニア版。アレクサンドロスが「これぞ！」と思う友人 18 人を選び、全校生徒 19 人の学園で、先生はアリストテレス。軍事学・物理学・数学・哲学・歴史学、ありとあらゆる学問を、アリストテレスから学ぶんですよ。アレクサンドロス大王の部下は 18 人いますが、この時に一緒に学んだ学友たちが彼の大帝を支えています。

20 歳で父が亡くなり、21 歳でギリシアを平定し、22 歳で父親が目指していた東方遠征、ペルシアの討伐に出て行き、以後 10 年間一度もマケドニアに戻りませんでした。10 年間 1 回も負けなかった。10 年間連戦連勝で、インドまで行くんですよ。

しかし、10 年後の 33 歳の時、熱病にやられて死んでしまうんです。高熱にうなされている時、18 人の部下たちが来て、アレクサンドロスに聞きました。「大王様、この広大な帝国の後継者は誰でしょうか。」実はアレクサンドロスの妻はペルシア人で、彼女が妊娠中に亡くなるんです。赤ちゃんを後継者にできるわけがない。「18 人のうち、誰が後継者なんですか。」アレクサンドロスが言ったのは「ふさわしい人」。罪作りや…。だって、18 人全員が「俺がふさわしい」と思っている。

最終的に 3 人残りますが、それぞれが造った国があります。

①アンチゴノス朝マケドニア ②セレウコス朝シリア ③プトレマイオス朝エジプト。こんなん覚えなくてもいいですよ。僕は世界史がむちゃくちゃ好きやったから、クリスチャンになって、今まで好きだった勉強がこんな風に結びついて行くのかと思って、楽しくて仕方がない。辛いのはのど痛いことだけです。今ね。

問題は、セレウコス朝シリアはサイズがでかすぎたんです。なので、中央アジアの方までコントロールが利かなくなり、中央アジアを治めていたギリシア総督が、セレウコス朝シリアから独立して、バクトリアという国を造りました。

この 4 つが、広大なマケドニア帝国を分裂させてしまったんですね。その背には四つの鳥の翼があり、その獣には四つの頭があった。そしてそれに主権が与えられた。

ダニエルが死んだ後に起こることですよ。それが BC553 年に既に書いてある。

聖書の預言で凄いですよ。調べれば調べるほど。

ところが、あまりにも詳しく成就しすぎているので、「後から書いたんちゃうか」と言う人がいるんです。それが起こった後で、さも前から預言しているような文体にして書いたんちゃうか。そう言う人いますねん。かわいそうな人や。

ヨセフスの『ユダヤ古代誌』などを見ると、アレクサンドロス大王は、この旧約預言の預言を聞かされてるんですよ。それで、彼はユダヤの国を冷遇しなかったと書かれています。そういうことが出て来ると、「その辺については、まだ結論が出てない」とか言うわけ。出てるわ。何言うてんねん、ほんまに。こっちはのど痛いのに、ナニ言うてんねんと。

これが1つ目の幻。ギリシアに関してまだまだ言いたいことはありますが、ローマに行きます。

2 番目の幻 ▶ 4 つの世界帝国の 4 番目の国についての解説

7 その後また夜の幻を見ていると、なんと、第四の獣が現れた。それは恐ろしくて不気味で、非常に強かった。大きな鉄の牙を持っていて、食らってはかみ砕き、その残りを足で踏みつけていた。これは前に現れたすべての獣と異なり、十本の角を持っていた。

4 番目の帝国：ローマとそれに続く国

第四の獣はローマですが、ローマに端を発する、世の終わりまで続く世界帝国のことです。第四の獣は4つの発展段階があるので、話の構成上 7 章 19 節に飛びます。

19 それから私は、第四の獣について確かめたいと思った。それは、ほかのすべての獣と異なっていて、非常に恐ろしく、牙は鉄、爪は青銅で、食らってはかみ砕いて、残りを足で踏みつけていた。

ダニエル書で4つの帝国の預言が出て来るのは2回目です。

1 回目は 2 章に、金属の形で紹介されていました。

金はバビロン。銀はメド・ペルシア。青銅はギリシア。鉄はローマ／ローマを発祥とする世の終わりまで続く国。

①牙は鉄、爪は青銅。これは当然、2 章を念頭に置いて書かれていると思います。つまり、第四の獣はギリシアの文明を引き継いだ強力な国。

ローマの文明を語る時、よくグレコローマンという言い方をします。レスリングで、グレコローマンスタイルとかグレコローマンとか、聞いたことありませんか。僕は高校の時、レスポールのエレキギターを弾いてましたが、グレコというメーカーでした。ギブソンを買えなかったのがグレコ。ええ音するんですけど。

グレコってギリシアですよ。ギリシアの文明、例えばローマには12の神々がいましたが、これはオリンポス山にいるギリシア神話の12神がそのまま、ローマ風の

名前に変わったんです。ギリシア文明を引き継いだ強力な国なんですね。

②ほかのすべての獣と異なっている。それまでに登場した3種類の獣／バビロン、メド・ペルシア、ギリシアとは違って、非常に恐ろしい。

この国の支配は、先の3つの国とは全く違う統治体制なんですね。帝国主義です。

バビロン、メド・ペルシア、ギリシアは支配して統治する時、現地の人を雇い、任命して統治させました。

バビロンはユダヤの国を支配しましたね。結局言うこと聞けへんから滅ぼしたけど、最終的にはゼデキヤという王を使ったんです。エホヤキムの後ですよ。

ゼデキヤ王はユダ部族ですが、彼を王に任命したのはネブカドネツアル王。

バビロン人がユダ王国までやって来てコントロールするんじゃない。

ユダヤのことをよく分かっているユダヤ人のロイヤルファミリーを任命して、統治させたんですね。

ペルシアもそうでしょ。ペルシアのキュロス王は「ユダヤ人は元の場所に帰っていいぞ」と言いましたが、それは独立ではなく、あくまでもペルシア帝国の中の一つの州です。その時の総督はネヘミヤ。ネヘミヤはユダヤ人ですよ。

ペルシア人がわざわざ行かない。現地の人。

アレクサンドロスもそうです。ギリシアでユダの国を治めたのは、ギリシア人が任命した大祭司でした。

ところがローマは違う。ローマ人が行って、やりたい放題するんですよ。

イエス・キリスト時代のローマ総督は誰でしたか。ピラトです。

カエサル／ジュリアス・シーザーはずっと借金王でしたが、突然大金持ちになりました。『ガリア戦記』今のフランスですが、ガリア総督になったからです。

ローマ総督の給料はゼロでした。その代わりに、どれだけしぼり取っても良かった。

それで、莫大な大金持ちになって帰って行くんですよ。でも、やられた方はたまったもんじゃない。そのように徹底的にしぼり取る国です。

ローマには4つの発達段階があります。

第1段階と第2段階；**23** **彼はこう言った。『第四の獣は地に起こる第四の国。これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。』**

第1段階▷**第四の獣は地に起こる第四の国。ローマ**です。

先ほどの4つのギリシアの末裔国家のうち、最後まで生き残るのはセレウコス朝シリアとプトレマイオス朝エジプト。これを滅ぼしたのがローマ。

なので、ギリシアの次に出て来る国という意味で**第四の国**。この国は単数形です。

第2段階▷**ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。ローマの流れを汲む、全地球的に世界を支配する世界統一政府**です。

ほかのすべての国はバビロン、メド・ペルシア、ギリシア。

全土はコルアルアーという言葉で、多分アラム語。単数形で全地球です。
つまり、ローマの流れを汲む、全地球的に世界を支配する世界統一政府ができる。

ローマは全土をコントロール下に置きませんでしたよね。主にヨーロッパですよ。
ユーフラテス川を越えることができなかった。ローマが最大の時も、アジアには漢
という国がありました。中国。漢はローマの支配下に入ってません。

第1段階は第四の国／ローマですが、やがて第2段階で、ローマの流れを汲んで全
世界を統治する世界統一政府が出来上がります。世界統一政府は未だかつて存在し
たことは1回もありません。これから起こることを、ここで預言してるんですね。
世界には今200の国がありますが、1つの国になる時代が来る。

第3段階と第4段階；**24 十本の角は、この国から立つ十人の王。彼らの後に、も
う一人の王が立つ。彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。**

第3段階▷**十本の角は、この国から立つ十人の王。10か国の世界**です。
世界統一政府は上手くいきません。失敗するんです。最終的に10ブロックに分か
れます。今200の国がありますが、それが1つになり、さらに10個に再分裂する。
つまり、世界は10か国になるんですね。これが第3段階。
そして、その時代に艱難時代が始まります。艱難時代は7年間続きますが、前半の
3年半までは世界は10か国です。

第4段階▷**彼らの後に、もう一人の王が立つ。彼は先の者たちと異なり、三人の王
を打ち倒す。反キリスト**です。

10人の王がいて、彼らの後にもう一人の王が立つので、全部で11人。
11人目の王は三人の王を打ち倒す。すなわち7人の王と、彼らの上に立つ、後から
出た1人の王がいる。彼は自分のことを神と名乗ります。これが反キリスト。

**25 いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを悩ます。彼は時と
法則を変えようとする。聖徒たちは、一時と二時と半時の間、彼の手に乗ねられる。**

いと高き方は、聖書が語っている創造主のことです。特に旧約聖書では、異邦人が
イスラエルの神を指す時に、この表現をするのが多いんですね。
異邦人出身の反キリストは創造主に逆らうことばを吐く。自分こそ神だと名乗る。
これは**黙示録**に出て来ます。
いと高き方の聖徒たちは、艱難時代にイエスを信じるユダヤ人です。彼らを悩ます。

また、一般のユダヤ人たちも大いに悩まされます。彼は時と法則を変えようとする。
時はアラム語で、直訳は「諸々の季節」。

イスラエルには季節にしたがって7つの祭りがあります。春の祭りと秋の祭り。
春の祭りと秋の祭りの間に来るのが夏。祭りによって季節を規定しました。
諸々の季節を変えるというのは、おそらく祭りを変えるという意味でしょう。
ユダヤの神ではなく、反キリストを神として拝み、反キリストが定めた祭りをせよ。

法則、英語の聖書ではLawですが、律法を変えようとするという意味だと思います。つまり、聖書の書き換え。反キリストはだれよりも神のことばを恐れているので、聖書の書き換えをやるでしょう。なので、聖書のことばに真実に従おうとする人は実に悩ましい。

一時と二時と半時の間、彼の手に委ねられる。艱難時代の後半3年半です。以上が2つ目の幻です。

3番目の幻▶4番目の国を終わらせる裁きについての預言

9 私が見ていると、やがていくつかの御座が供えられ、『年を経た方』が座に着かれた。その衣は雪のように白く、頭髮は混じりけのない羊の毛のよう。御座は火の炎、その車輪は燃える火で、

10 火の流れがこの方の前から出ていた。

燃える車輪は**エゼキエル書 10章**に出て来ますが、ケルビムの上に座しておられる神の姿です。ここで裁きが行われますが、それは「白い御座の裁き」「最後の審判」ではありません。艱難時代が終わった後、ヨシャパテの谷で行われる裁きです。

11 (この裁きの) **そのとき、あの角(反キリスト)が大言壮語する声がしたので、私は見続けた。すると、その獣は殺され、からだは滅ぼされて、燃える火に投げ込まれた。**

反キリストが燃える火に投げ込まれるのは、千年王国の前なんですね。

なので、ここの裁きは千年王国が始まる前、艱難時代が終わった後の裁きです。

4番目の幻▶キリストの地上再臨とメシア的王国／千年王国について

13a 私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲とともに来られた。

天の雲は天から来た雲。天から来た雲とともに来られたというのは天から来られた。人の子のような方は、天から最終的にはエルサレムのオリーブ山の上に来られる。つまり、これはキリストの地上再臨のことなんですね。

14 (キリストの地上再臨の時) **この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。**

これが千年王国／メシア的王国です。旧約聖書はここまでですが、新約聖書では、千年王国の次に来る新天新地について語っています。

でも、それは奥義なので、ここでは明らかにされてないんですね。

しかし、ここで終末預言が十分に語りつくされていると思います。

最後に、私たちに直接関係があることを申し上げて終わらしましょう。

13a **人の子のような方が天の雲とともに来られた。**

キリストが地上再臨される時、単独で来られるわけではありません。

2種類のを引き連れて来られます。

マタイ 25 章 31 節。 イエスのことばです。

人の子は、その栄光を帯びてすべての御使いたちを伴って来るとき、その栄光の座に着きます。

地上再臨のことをキリスト自ら語っておられるんですが、一人ではなく、すべての御使いたちを伴って来る。これは、反キリスト軍を討伐する裁きのための到来なんですね。

ユダの手紙 14 節

アダムから七代目のエノクも、彼らについてこう預言しました。「見よ、主は何万もの聖徒を引き連れて来られる。」

これもキリストの地上再臨のことです。

何万ものは、数えきれないほどを形容している言葉で、数え切れないほどの聖徒（イエスを信じた人）たちを引き連れて来られる。

地上再臨の時にイエスと共に天から来るということは、その前に天に引き上げられているということ。この人たちはクリスチャンです。

クリスチャンたちが天に引き上げられることを**携挙**と言います。

★携挙に関して言える 3 つのこと。

①いつ起こるか、だれも知らない

時々カルト宗教で「携挙はこの日にある。」セブンスデーアドベンチストもそうですね。でも、その日になかった。それで「天で携挙があった」と。

どう理解したらいいの?! その日がいつか、だれも知らないんです。

②いつでも起こり得る

今でも起こり得ます。今あったらどんなにいいでしょう。のどの痛いのもすぐ治る。

③艱難時代の前に起こる

私たちは艱難時代に入る前に、この世界から救われます。そのチャンスがあります。それは携挙に与ることですね。

携挙に与れるのは、イエス・キリストを自分の救い主として信じているすべての人です。ぜひイエスを信じてください。

携挙に与る。それは最高のことです。心からお勧めします。

☆*:..o...:* ☆*:..o...:* ☆ ☆*:..o...:* ☆ ☆*:..o...:* ☆ ☆*:..o...:* ☆ ☆*:..o...:* ☆ ☆*:..o...:* ☆

引用文献 ; 新日本聖書刊行会『聖書 新改訳 2017』いのちのことば社,2017